



前進を更なる突破の嵐を

全中大の学生、院生、教職員諸君
とりわけ商学部と学友諸君

高スト実(平) 11/27

昨日の学長、校務、同文において、当局はいまだ民主的市大の理想を、ふりまこうとしていた。しかしその名にも及ぶ庄臣の学友は、もはやどういつた理想をふりつて、当局の本性を暴露し徹底的に追及する、結果したるに考える。それは理学科、三学部、医学部、とりわけ厚生看護学問題の個々の現象に分れるところの当局の本質、これは国家収力と劣着した態度、否、国家収力の有るべきを、反動化路線を先走してやつていこう、一定程度暴露したにろう。

その中にあつて、厚生学院問題で明らかになつたことば、斗争する一人一人を十数名の教員でもつて部屋に監禁し、牢獄せせとヒキツケをおこすまでいひのたのであつた。それは医学部教授会のハレンチ行為の一端としてあつたのだといふこと、そしてとりもなおさず大学当局の方針を根柢に示すものであることを我々は認識し、こういった態度を体制打倒を同文において追及したのであるけれど、彼らはそんな話ばかり聞いておられませんか、事実を向い合はせませうといふたふうに、偏見と虚構に陥れることなく、個別問題に接近し、そこをのりて当局の暴力性を徹底し居直りつづけ、学長自身も彼の一切の責任を回避しつ、付たのであつた。

我々は、この当局の責任回避を一切許すことはできない、そして何よりもまず、当局がこの同文によつて隠し合ひは終つたし、その後世だけをやりさしやうといふたふうに、この同文を全学集会的なものであることによつて、斗争手段である収拾正常化へきつしぐうにつき進めつていっているのかといふことを、はつきりと認識し、そのような動きを断固阻止する上にも、連綿同文をおこなつていく必要があるだろうと考える。再度の回目を巧みとやらを言つたけれども、彼らは一切納得のいく説明もなしに、都合が悪いといふことばかりで、全く誠意も感じず、付たのである。昨日といふのは、その矛盾打倒において確約したにも拘らず、全くその確約を無視したのである。こういった隠し合ひをまじはせなければならぬと、全学集会的な斗争をやらせたいと、何々を期待することなどであるといふが、否、断じて否である。

しかし我々は改革にとつて是非とも同文が必要であると考えている。斗争ながらも、不満ながらも、二歩譲つて、局面的な手段から、校務会同文をもつことをはつきりと、大衆の前で明らかになせたいのである。このようないふことをし合はせて、当局に早急な自己批判を要請し、改革に向けての姿勢を正す必要があるのであらう。

だがしかし、我々の批評はきつたものであるとはいひがたい。全学集会的な斗争は、全学集会的な斗争の決定をめぐり、同文にたよりながら進めよう。

商学部においては、CIB、CIBDの改革の学友はクラス我説をもつて立ち上がった。他のクラス、ゼミは異説でも、CIB、CIBDに連帯しようではないか。そして我々の手で大学改革を押し進めようではないか。改革とは、誰かをやつてくれるものではなく、自らの主体性をもつて取り扱ふ限り、全く何の意味もたない。昨日の同文に結集さ小ぢかつた学友にたいし我々は再度呼びかけた。そこにおいて当局の犯罪性、欺瞞性を暴露し、人間的な悔りをもたなければならぬ。

我々商学部においても学務委員会といった、当局の御用機関の存在がある。最近においては彼らの中にはゼミ旅行にいったりしてこの同文に一切とりくまなかつた。我々はこの学部の最終一貫して批判してきたが、それは何の期待もいふてはならない。斗争一回生有るは斗争一回を公認を刷り界報にもこの同文にとりくんでいく。学部Cへの幻想を捨て、唯一商学部で斗争していく。商大上東の旗の下に結集し、市大斗争を戦線的に拓き進めていくではないか。